

森のようちえんに通う一女兒の縦断的観察 — 主体性の育ちを中心に：3年間記録の1年目 —

金子龍太郎¹・西澤 彩木²

Longitudinal Observation of One Female Child Attending a Forest Kindergarten — The Analysis of Her First Year Experience Focusing on the Development of Her Independency —

Ryutaro KANEKO¹, Saiki NISHIZAWA²

Abstract: The purpose of this research is to conduct a longitudinal study of one female child for three years in order to observe her independent activities in a Forest Kindergarten, outdoor daycare with few restrictions by adults. In this article, we analyzed the first-year video record taken once a month from April 2015 to March 2016. We also measured the number of steps all 20 children walked during the free play time by using pedometers. Behavioral indicators showed that they tended to engage in the following activities: resting state (93.5%), the standing position (83.2%), the manipulation of hands (86.7%), and coming close (78.3%). On the other hand, “play and work” were just 40.9%, suggesting that she had no idea at first what to do with extensive outdoors because they were allowed to do anything they wanted in the woods where there are few playground equipment and toys. It is considered that what is important is the process of finding out the things that they want to do. There were as many as 48 kinds of “play and work” under the environment in which children have time to play freely for about three hours with seasonal changes. Lunchtime and the place to eat were varied each month, revealing Forest Kindergarten’s atmosphere of freedom in which children do not eat lunch in the same place and time. All children’s average steps taken for an hour were 1612.0, showing that they do not necessarily walk so much, compared to other kindergartens and nursery schools.

Key words: forest kindergarten, independent activity, video recording, pedometer

目 的

2012年から始まった滋賀県大津市の任意団体：せた♪森のようちえん¹⁾の保育理念は「子どもが自分たちで生活をつくっていけるように」で、重視するのは主体性²⁾である。そのため、広い野外保育の場で、異年齢の子どもたちが意見を出し合い、自ら調整して活動することを大事にしている。保育者は、幼児の主体的な活動が確保されるように、幼児の特性を踏まえて環境を構成していくものの、前面に出たり、

教え導くのではなく、子どもが自ら感じて考えられるように、見守り、場を整え、任せながら支えていく（西澤・田中・管，2016）。

次に、筆者たちは森のようちえん(Wald-kindergarten)を「変わった保育、珍しい保育」と考えてはおらず、むしろ Kindergarten の本来の姿だととらえている。その根拠として、フレーベルがかつて森林行政官の職に就いていて、森に幼児たちを連れて行って遊ばせた（長田，1955）という背景を踏まえて、後年 Kindergarten の名称で、幼児教育の場を創設した事実が挙げられよう。また倉橋惣三は、子どもは庭に育つ草花と同じく、必要な環境を与えれば、放っておいても育つという自発性の原則

1 龍谷大学社会学部

2 せた♪森のようちえん

を唱えた(倉橋, 1936)。したがって、森という広い野外での保育は、自発性・主体性の育ちを支える場としてふさわしいと考えられよう。

森のようちえんの先行研究では、2010年以降に限ってみても、ヨーロッパの森のようちえんを紹介して、日本の幼児教育への示唆を論じたもの(木戸, 2010; 東方, 2011; 名須川ら, 2012)や保育実践を集めた書籍(今村, 2011; 2013)など、近年多くの論文・書籍が発表されている。そうした中で、幼児の行動を取り上げた研究には、一人の幼児を対象にして継続観察を行い、自然や他者と受動的にかかわる状態から、積極的・主体的にかかわるようになった過程を明らかにした研究(中西ら, 2010)、一男児が森の中の木(細木)で遊びを展開する様子を詳細に記述した研究(中坪ら, 2011)、および幼児の遊びの移行場面に着目して観察した結果、森という空間がもつ曖昧さが幼児の遊びを発展的に移行させたとする河口ら(2015)の研究がある。さらに、梶浦・今村(2015, a; b)は、落ちていた木の枝などの自然物に焦点を当てて、接触回数や扱い方を詳細に調べた。

本研究は、ビデオ撮影と歩数計により、森のようちえんの特徴を捉えようとする、長期間に及ぶ行動研究である。約3時間の保育中、大人の規制がほとんどない森のようちえんで、主体的行動の出現様相を見るために、一女児を対象とした3年間の長期継続記録を行うが、本論文では1年目の記録について論じていく。

方 法

1. **せたゝ森のようちえんの保育体制**: 園舎をもち、異年齢・少人数で保育を行っており、3, 4, 5歳児の縦割り1クラス編成である。2015年度の構成は、年少4名、年中10名、年長6名(男児11名、女児9名)で、毎回3~4名のスタッフが見守っていた。保育日は週3~4日で、保育時間は9:30~14:30であり、朝の会と終わりの会を毎回行うが、あとは自由時間となっている。

2. **保育環境**: 保育場所は、滋賀県営都市公園「びわこ文化公園」の森や草地からなる里山ゾーン³⁾(約20ha)、そして大津市内の田畑であり、原則として、火曜と水曜が森、木曜が田畑で保育している。それらの保育フィールドの中で、本研究では公園に限定して記録を行う。この場所は、第一筆者が2001年から環境ボランティア活動を開始し、保育環境整備を継続してきた。

その結果、里山ゾーンの一部(2~3ha)で幼児たちが安全に過ごせる自然環境が整った。このボランティアグループは、ドイツで森を管理するフォレスター(公務員の森林官)の役割に準じたものといえる。

3. **対象児**: 2015年度の新入園児4名の中から、3年間の通園を保護者が確約した3歳女児を選択した。対象児本人には、ビデオ撮影を行うことを説明して同意を得た。保護者には、研究目的と内容について詳細な説明を行い、調査において不都合が生じた場合には止めることができることを伝えて、インフォームドコンセントを得た。

4. **ビデオ撮影による行動記録**: 2015年4月から2016年3月まで、月1回(8月は休園)、計11回のビデオ撮影を行った。使用した機材はJVC製のGZ-RX500である。毎回の記録時間帯は、朝の会が終了した10時過ぎから、14時前後の終わりの会までの、自由な活動を行う約3時間であり、総録画時間は28時間29分であった。

ビデオ記録から、①運動指標の「静止」、「歩行」、「走行」、②姿勢の「立位」、「座位」、③活動として「手の操作」(手で触る。手を使って何かをする)、「遊び・作業」(明らかに意図的な遊び・作業で、保育者の指示ではなく、対象児の自発的、主体的行為だとビデオ記録で確認したもの)、そして④他者との距離を示す「接触」、「近接」(他者から約50cm以内)、「分離」(他者から約50cm以上離れている)、および「食事」について、それぞれの生起の有無を1分間ごとにチェックするタイムサンプリング法を用いて用紙に記録した。この記録用紙は、根ヶ山(1997)に基づいて作成した。

5. **歩数計による歩数調査**: ビデオ撮影と同じ日時に、全児に対して歩数計測定を行ない、対象児の運動量が幼児全体の中で占める位置を把握するとともに、歩数測定の実験結果と比較できるようにした。

機材は簡易歩数計のYAMASA製EX-300であった。日によって測定時間が異なっていたので、1時間当たりの歩数を算出した。

以上、ビデオ記録の行動分析と歩数計測を行い、対象児の行動を定量化した。その上で、対象児が集中して取り組んだと判断される、出現時間が30分以上と長い「遊び・作業」の2事例を保育者である第二筆者がエピソードとして文章化した。

結果と考察

1. ビデオ記録

各月の記録時間中に当該行動が生じた割合を算出すると、①運動（静止：93.5%，歩行：56.1%，走行：13.1%）、②姿勢（立位：83.2%，座位：33.7%）、③活動（遊び・作業：40.9%，手の操作：86.7%）、そして④他者との距離（接触：31.9%，近接：78.3%，分離：44.3%）であり、多かったのは、「静止」93.5%、「立位」83.2%、「手の操作」86.7%、「近接」78.3%だった。

た。また、「遊び・作業」は40.9%と少なかったが、3時間前後の自由遊び時間がとれて、四季折々の変化がある森のようちえんでは、遊びの種類が多く、48種類の「遊び・作業」が見られた（表1）。その際、「～観察」「～乗り」「虫関連」は一種類として集計した。

ビデオ記録の中の対象児は、他児の様子を眺めていたり、何もしないでポーと立っているだけだったり、物を持っているだけというときもある。その結果「遊び・作業」の生起率は40.9%にとどまっている。「遊び・作業」は少

表1 「遊び・作業」の一覧表

記録月日 記録時刻 記録時間 (合計生起時間, 生起率)	「遊び・作業」の種類と生起時間（長い順）
4月21日 11:00~12:29 90分 (21分, 23.3%)	粘土ー6分, シダ採りー5分, ブランコー3分, 大人にじゃれつきー3分, 綱引きー1分, 大人の周り回るー1分, 切り株乗りー1分, 虫観察ー1分
5月12日 10:21~13:29 189分 (65分, 34.4%)	大人にじゃれつきー16分, 花摘みー7分, 図鑑ー6分, 池観察ー5分, キツツキの巣観察ー5分, 虫観察ー5分, おばけごっこー3分, キャリー乗りー3分, なぞなぞー1分, 花の指輪づくりー1分
6月16日 11:32~13:51 140分 (62分, 44.3%)	トンボを手ー21分, 赤ちゃんゴっこー12分, 大人にじゃれつきー7分, どっちにあるか?ー5分, キノコ観察ー4分, ガを手ー2分, 足で草切りー2分, 図鑑ー2分, 車ゴっこー1分, 他児とじゃれあいー1分
7月14日 10:53~11:55 62分 (34分, 54.8%)	スイカのケーキづくりー25分, 他児とじゃれあいー4分, 虫観察ー2分, キツツキの巣観察ー2分 (ビデオカメラの電源切れで途中終了)
9月28日 11:00~14:12 193分 (92分, 47.7%)	絵本ー21分, 木登りー14分, たき火ゴっこー12分, ドングリ拾いー11分, 葉ちぎりー10分, 虫握りー8分, 枯れ枝ー6分, ヒューム管登りー4分, どっちにあるか?ー2分, 草観察ー2分, 杭乗りー2分, 虫取りー2分, 紙筒ー1分, かくれんぼー1分
10月13日 10:03~13:41 219分 (92分, 42.0%)	大ブランコ+ロープー44分, シダ採りー16分, 土掘りー14分, 枝つながりー6分, キツツキの巣観察ー4分, 水たまり観察ー2分, 言葉遊びー2分, 木登りー2分, じゃんけんー2分, 地面観察ー1分, 切り株乗りー1分
11月10日 10:46~13:59 194分 (69分, 35.6%)	落ち葉の制作ー21分, 絵描きー11分, 大人にじゃれつきー10分, 粘土ー8分, 木の葉集めー7分, じゃんけんー4分, 木登りー3分, 絵本ー2分, 木の葉ちぎりー2分, ドングリ拾いー1分, ベンチ乗りー1分
12月15日 11:24~14:06 163分 (121分, 74.2%)	木登りー68分, 枯れ枝と葉の制作ー31分, 土掘りー8分, ベンチ運びー5分, BB弾拾いー3分, 口紅塗る真似ー2分, 枯れ枝ー1分, 楽器ー1分
1月26日 10:30~13:51 202分 (65分, 32.2%)	大ブランコ+ロープー19分, 枯れ枝ー18分, かくれんぼー16分, 大人にじゃれつきー4分, 木登りー3分, 池の水ー3分, 木登りー3分, 切り株乗りー1分, 足で土掘りー1分
2月16日 12:01~14:14 134分 (38分, 28.4%)	紙の制作ー15分, コイ観察ー5分, かけっこー5分, 一輪車押しー3分, 枯れ枝ー1分, 図鑑ー1分, 丸太乗りー1分, ドングリ拾いー1分
3月1日 11:02~14:11 190分 (22分, 11.6%)	木登りー5分, 大人にじゃれつきー5分, 追っかけー4分, 車止め乗りー3分, 大人の周り回るー2分, シート遊びー1分, おうちゴっこー1分

(太字は30分以上生起した「遊び・作業」を示す)

なかったが、遊んでいない時間も大切ではないだろうか。既存遊具やおモチャがほとんどない森の中の活動を子どもに任せるからこそ、広い野外で何をしたらよいのか分からず、迷い戸惑うのだが、その後自分のやりたい行為や遊びを見つけていく過程が重要と思われる。また、「遊び・作業」が少ない理由として、自然の様子をじっと観察したり、広い森の中を移動する時には、「遊び・作業」として取り上げないという、本研究の方法上の問題が挙げられよう。

次に、対象児は大半の時間、何かを触っているか手を使っており、「手の操作」は86.7%におよぶ。手には多くの感覚器官(触覚)が集まっていて、「第二の脳」「突き出た脳」と言われているので、手を使うことには重要な意味がありそうだ。

図1は、「手の操作」の出現が最も高かった2015年12月15日の記録(後述のエピソード事例2)であるが、163分の記録中、「遊び・作業」は121分(74.2%)、「手の操作」は154分(94.5%)で出現していて、「遊び・作業」以外の移動時にも、木の枝などを持ち歩いていた。

このことに関連して、落ちている木の枝を頻繁に拾い遊ぶ、森のようちえんに通う幼児を観察した研究(梶浦・今村, 2015a; 2015b)を見てみよう。幼児たちが森で手にする自然物の約40%は、枯れた枝や根であり、手という感覚器官で枝などの特徴を「受容」し、触れて、感じ、対象物の本質を知ろうとする「探索」行為を繰り返した。特に、枝は遊びの「発祥」点となる役割を果たし、幼児の「創造力」を高める可能性を秘めていた。そして、枝は幼児の心身の動きや遊びに柔軟に応じる「玩具」として使われ、さらに枝は仲間とかかわる契機となる道具とも考えられる。枝一本であっても、子どもにとって大切な学びと成長の素材なのである。こうした観察に基づいて、梶浦と今村は「自ら枝を手

にする幼児の実際の動きには、重要な意味や可能性が隠されている」と考察した。

2. エピソード記録

表1の主な「遊び・作業」の中から、30分以上持続して、対象児が集中して取り組んでいたと判断されるのが10月の大ブランコと12月の木登りである。そのビデオ記録を保育者である第二筆者が見直してエピソード記録にまとめた。ビデオ記録によると、大ブランコは12時31分～13時32分の間に、大ブランコ乗りと、他児が乗ったブランコを揺らすために数人でロープを引っ張る活動を5回ずつ繰り返し、合計44分取り組んだ。また、木登りは11時25分～14時03分の間に、15回昇降を繰り返し、合計68分におよんでいた。

<背景>

対象のM児は、入園当時、年長に姉がおり、安定して森での生活を始めた。同学年に女兒が1人だけだったことから、年上の女兒に交じて遊ぶことを好む。自らの思いをもって行動するが、思い通りにならないときなども、やりとりをしてから気持ちをおさめ、泣いて訴えることが少ない。スタッフはその姿を認めながらも、この時期にはまだまだ自分の思いを存分に出していてもいいと思って支えている。

<事例1：大ブランコ(10月13日)>

坂の上で、ごっこ遊びに入りながら、ブランコのロープかけをしている年中児を見下ろす位置でおにぎりを食べているが、「したにおりたい」と言って、木を支えに、すべりながらも降りて行く。ロープかけをしている年中のKn児、Ko児、Sa児に混ざり手伝うが、すぐにロープを引く方向を理解し、一緒にブランコを完成させる。M児は

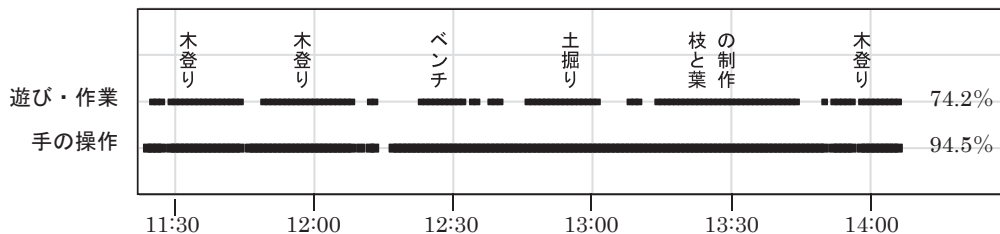


図1 「遊び・作業」と「手の操作」との出現様相(12月15日の記録)

(内訳: 木登り: 68分, 枯れ枝と葉の制作: 31分, 土掘り: 8分, ベンチ遊び: 5分)

ブランコに乗ろうとするが、年長児が「テストをするから」と言うので一旦降りる。交代するまで、根気よく引っ張る係になる。時折Kn児の言葉に続いて「Mものりたい～」と言ったり、ごっこ遊びで電話をして、「おかあさん、なかなかかわってくれないの～」と訴えたりしているが、引っ張る時がくると、力いっぱい引っ張っている。ようやく順番がきたが、ブランコの木の手柄にあたり、「いたい！」と泣き出す。すぐにまわりの子が駆け寄り様子を聞き、M児をブランコに乗せようとするが、高さがあり難しい。M児は泣き止み、座る棒に右足をかけて、自分で座る。2人乗りをするKo児の片足が乗っているだけの状態から揺れ始める。2人歓声をあげ、M児は「もっとやってー！」と喜ぶ。Ko児がM児に「おもしろい？」と確認。「うん！」と答え、2人で「きゃはは！」と揺れを楽しむ。揺れているときにロープを引っ張られると向きが急に変わるが、その動きも面白く、そのたびに笑いながら6分ほど大きな揺れを楽しむ。

一度、ブランコの順番をめぐって遊びが中断する。その間、シダ採りで過ごし、大ブランコが空いているのが目に入るとMは、「のろ！」と1人で乗りに行く。みんなが戻ってきて、別の子の順番であることを聞くとすぐに降りる。「じゃあ、Mひっぱるのいい？」と言いながらロープを引っ張りに行く。年長2人が乗ったブランコは重いので、M児の力でかなり引っ張り上げられた。年長児が納得するまで引っ張り、今度は順番がきてKa児とKo児と3人乗りに挑戦する。

「Mちゃん、ここ」と促され「まんなか？」と言いながら座ろうとする。年長児に「3人は重くて無理！」と言われて2人になる。うまく引っ張ってもらえず、立ちこぎをしたり、引っ張ってくれる人を呼んだりしているが、「じゅんばん！」と言われて降りる。

<見とりと手だて>

ロープをかけるときに主導しているのは年中児だが、M児がすぐに動きを合わせられるのを認めながら、一緒に達成感を味わえるように声をかけて支えている。また、「のりたい」という思いを出しながら、年中・年長児の動きに合わせ、聞き分けよく待つことができ、引っ張ること自体も楽しむM

児だが、どのタイミングで「のりたい」と言えるか、ブランコを楽しむことができるか、M児に委ねながら様子を見て、必要な場合には助けるつもりでいる。M児が待っているときも、他児とやりとりをして納得しながら進んでいる場面が多く、M児が自分の思いを周りに伝えるので、結果的にあまり口をはさんでいない。

<事例の考察>

主体的行動の表れの一つに、言葉での意思の伝達があるが、M児は言葉でしっかり伝える一面もありながら、ビデオ記録を切り取ってみると、年中・年長児の言葉につられて、まねをして反応していたり、強く言わなかったりする時があり、年少児として丁寧に支える必要があることが分かる。ただ、その支えは大人が担うときもあれば、この事例のように他児の言葉につられて自分の思いを再確認して発言していたり、新たに3人乗りというアイデアが生まれ、3人で楽しみに待ちながら引っ張ったりすることで、M児の思いが支えられている。

また、言葉に表れない沈黙の時間も重要な意味をもつ。一つの行動に至るまでに、長い観察の時間があり、そこは無言で、一見“ぼーっとしている”ように見えるが、この時間こそが育ちにつながる大事な時間なのだ改めて感じる。一人でおにぎりを食べている時間に、次の行動のためのいろんな情報を吸収して心が動いていた、黙って順番を待つ時間にまわりの言動や、ロープとブランコの動きを見ながら状況判断したりしているからである。

1時間近いブランコ遊びの中で、M児が楽しんでブランコに乗った時間は10分程度だが、その前後の長い時間の中に、「次もやりたい」「次はこうしたい」と思ってブランコに向かったり、別の主体的な活動につながる経験が重なっていることを確認できた。

<事例2：木登り（12月15日）>

10月の事例以降、変わらず安定して森での生活を続けている。年上の女兒についていくことも変わらず、この日も朝から木登りをする年長児の周りに行く。

年長児が登っているモミジの木（送迎の

場所にあり、身近な木)の下にきて、M児は様子を見てうろうろしている。そのうち両手で枝をつかみ、足を幹に添わせて両膝を枝にかけ、ナマケモノの格好でぶら下がる。帽子が落ちて一度降り、同じようにぶら下がるが、また帽子が落ちる。世界をさかさまに見ながら笑顔でいるが、別の年長A児が帽子をかぶせてくれようとする、降りてかぶり直す。木の上にいる別の年長児が降りてくる様子を見届け、また手をかけ足をかけて同じ格好になる。また帽子が落ち、A児が拾って届けようとするが、今度は降りずに上体をおこして木の上に腰掛ける。「じぶんでのぼれた!」とA児にこやかに言うと、帽子を受け取りかぶる。A児も「Mちゃん、すごい!」と応える。腰掛けた枝に立ち上がり、もう一段高い枝に座り、景色をみる。先ほど年長児がしていたように、木を少し揺すって紅葉を落としながら、体勢をかえて一度降りてくる。場を離れるかと思いきや、すぐにまた引き返し、同じ手順で登る。帽子がまた落ちたが、今度も帽子を気にせず登って腰かけ、下の友だちの様子を眺める。スタッフに「みて～!もうひとつ、うえにのぼれる!」と言いながら立ち上がり、上へ。木の股に座ったり、しゃがんだり、片手を離したり、樹上でいろんな体勢をとっている。

不意に降りて、「トイレいってくる、木まもつといて」とカメラマンに言うが「別の人をお願いして」といわれると、また登り始める。年長H児が弁当と水筒をもってきて、M児に「すいとうもって」と頼み、「Hものぼらせて」と上がってくる。M児は場所をあけて座り直し2人で座る。M児は「トイレいってくる」と降りて、今度はトイレに走っていく。戻ってきたらすぐに木に登り、帽子を枝にかけける。いったん降りたH児が「おにぎりかけけるばしょにかけて」と水筒とおにぎりケースを渡す。M児はケースを枝にかけ、帽子もかけ直す。おにぎりを横で食べるH児や、下から「はっばとって」というA児など、世間話をする他の子のやりとりを聞きながら、こやかに木の上で座り続ける。別の子が登りたいというのでH児が降りるとM児も降りるが、また登る。登り始めてから45分続けていた。それから

降りて、他の子がいる場所へ行った。

その後も、登ったり降りたりを繰り返して、別の遊び(葉っぱ製作やごっこ遊び)や、サクラの木登りにも挑戦するなどして、再びモミジの木に登りにくる。リュックをかけて“自分の木”と決めた木に登る。何度も繰り返しているのだから登り降りの動きはスムーズになってきた。降りて両手を広げて駆け回ったり、年中Ka児がその木に登ろうとすると、Ka児のスティックをもってあげ、降りてくるのを待つ。再び登るとKa児も登ってくるので、それをかわしながら枝を移る。一段高い枝に登って降りてくると、スタッフKの膝の上に乗っているKo児の横に座り、スタッフの膝に座り揺られるのを楽しむ。片づけの声を聞き、リュックをとりに行き、一日が終わる。

<見とりと手だて>

これまでM児の安定して過ごす姿や年長児と関わって遊ぼうとする姿から、もう少し自分がやりたいことに没頭したり、我を出してもよいなと思いながら、この日も姉たちについていくなかで、真似をして「のぼってみよう」と自ら動きだす姿を、スタッフは遠目に見守り、年長児との関わりにゆだねている。あとから「登れたね、やったね!」とM児と嬉しさと達成感を共有し、さらなる自信につながるよう願った。小一時間、木登りに集中した後、ごっこ遊びに入りたい思いから姉たちに関わりに行くが、丁寧には応えてもらえない状況が続く。M児の思いに添うなら、少し手助けのいる場面だが、M児が初めて登れた木に合計15回も登っては降り、降りては登ることを繰り返す姿に、その行為の大切さを思い、あえてスタッフは誰も手を貸さないでいる。M児の「みて～」という声に応えたり、降りてきた時にしっかり受け止めるようにした。

<事例の考察>

初めて一人で木に登れたこの瞬間は、その後のM児の育ちにとって大きい節目となった。何度も、自分のペースで自分の思ったやり方で、木の枝と対話しながら身体を動かしていける時間がたっぷり保証されていることの大切さを感じる事例である。以前と同じく、まわりを気遣ったり、遠慮したりするM児の様子が、最初の帽子が落ち

た時にも見られたが、帽子が落ちることよりも、次第に「のぼりたい！」思いが勝り、一人で、自分だけの力で完遂していく。そして「じぶんでのぼれた！」と的確に喜びを表現している。保育者としては、その瞬間に居合わせて喜び合い、M児の達成感を共にしたかった思いも残るが、何度となく年長児の木登りの動作を真似しようとして、「自分もやってみよう」と心が動いて始まった本事例において、年長のA児がきちんと喜びを受けとめており、静かに自信をつけたM児の育ちがあった。

最後に、「自分の意思で動いて」学んでいくことの価値を再確認する。できた内容より、その過程を大切にしている幼児教育において、結果的には「木登りが一人でできたこと」がM児の自信になり、その後の行動のゆとりや次なる学びのステージにもつながっている事例となった。そこでは、M児が何度も繰り返し、木の枝の位置、太さなどを自らの身体の動きと共に感じて理解している過程を、詳細に見ることができた。

3. 歩数計記録

1時間当たりの平均歩数では、全体が16120歩（男児：1773.7歩、女児：1414.4歩）であり、対象児は1425.8歩と女児の中では平均的だった。

せた♪森のようちえん20名の歩数は、一般の

幼稚園・保育園での研究結果と比較してみると（田中・田中，2009；吉岡，他，2012；笠次，他，2014；坂本，他，2014），必ずしも歩数が多いわけではなかったが（表2），一般の幼稚園・保育園との比較では，調査数が少なく断定できない。また，他の森の幼稚園の記録（久原，他，2015）と同等の歩数であった。

いずれにしても，今回の歩数の結果は，想定したよりも少ないもので，“広い野外ではたくさん歩くであろう”というわれわれの先入観が当てはまらなかった。ビデオ記録を改めて眺めると，静止した状態で活動に集中していたり，動植物を観察したり，他児や保育者の様子を眺めて，その後に真似をするという場面が見受けられ，歩数に現れない側面を探る必要性が浮かび上がった。

4. 各月の昼食時間と場所

次に，保育の中で大切にしたいものとして，何かに没頭して夢中になれることが挙げられるが，それに関連して，対象児の昼食の取り方を見てみよう。

M児の食事時間はまちまちで，場所も様々だった（表3）。昼食を各児にまかせて，一律に食事をとらないという保育のためである。中でも，12月と2月には，遊びと移動が多く，それぞれに没頭していたために，昼食をとり忘れたようだ。このように，幼児の活動が一律の食事時間によって中断されず，時間に縛られない，せた♪森のようちえんの自由さと，子どもに任せて主体性を重視する保育の一端が伺えた。

表2 歩数を調査した研究一覧表

一般の幼稚園・保育園

研究者（発表年）	1時間当たりの歩数（平均）	対象園・人数・クラス
田中・田中（2009）	1185.0歩（幼稚園） 1067.4歩（保育園）	幼稚園3園・保育園5園 157名（年中，年長）
吉岡，他（2013）	1077.0歩	保育園1園 34名（年少，年中，年長）
笠次，他（2014）	1542.3歩	幼稚園1園 61名（年長）
坂本，他（2014）	1718.8歩	保育園8園 781名（年長）

森の幼稚園（森のようちえん）

研究者（発表年）	1時間当たりの歩数（平均）	対象園・人数・クラス
久原，他（2015）	1691.9歩	広島大学附属幼稚園 25名（年長）
金子・西澤（2017）	1612.0歩	せた♪森のようちえん 20名（年少，年中，年長）

5. せたゝ森のようちえんの保育環境

研究対象の女兒は、都市公園の里山ゾーンという人の手が入った自然環境の中で、保育者たちに見守られながら、19人の園児と共に、さまざまな感情（面白い、つまらない、楽しい、飽きた、嬉しい、悲しい、やってみたい、やることが分からない、ハラハラドキドキ、怖い、など）を表して、歩き、走り、いたずらしたり、遊びに熱中していた。そこでは、没頭や集中だけでなく、やりたいことが見つからずに戸惑ったり、どうしてもできなくて悔しがったり、さらには他児たちから浮き上がっていた時もあった。楽しいばかりではなく、辛く苦しい時もあり、喜怒哀楽を伴う体験を積むのが森のようちえんでもある。子どもにとって、森は時には大変な場であり、楽しく遊んでばかりいるわけではない。

森のようちえんで子どもたちを育むのは保育者だけでなく、自然環境も含まれるので、森のようちえんの保育環境を構成するのは次の三要素となる。

1) 自然環境：自然と人との合作

広大な都市公園の森という保育環境には、人智が及ばない自然の豊かさと奥深さがあり、季節の変化、様々な気候、広さ、起伏がある。この場所は、いわゆる里山であり、人手を加えて、多様な動植物が棲息する豊かな生態系を形成している。一例を挙げると、樹木だけで約130種に及ぶ。

2) 人間環境：保育者

「口にチャック、手はうしろ」がモットーで、子どもに任せつつ、見守り支え、むやみに制止しないし、時間でしばらない。そして、子どもの今を見とり、必要な手だてを講じる。しかし、

野外では様々な危険もあるので、細心の注意が求められる。

3) 人間環境：異年齢の仲間

少人数の異年齢集団で、年長児を真似たり年少児を世話したりする、多彩で親密な仲間関係がある。子ども同士はニックネームで呼び合うし、筆者たちは「カネゴン」「さいちゃん」と呼ばれているところに、せたゝ森のようちえんの人間環境の特徴が表れている。

これらの三要素を2015年12月の記録にある、68分におよんだ木登り行動（図1；エピソード事例2）に見てみよう。モミジの木登りが現れるためには、①モミジを植えて育てる人の手が入った自然環境と、②木登りを制止せずに、子どもの力量を見極め、見守る保育者の存在と、③年少の対象児が年長児たちの木登りを見て、まねをして木に登ったのであり、異年齢の幼児の存在という人間環境も必要だった。

中坪ら（2011）が指摘したように、自然の環境の中で、いきいきした遊びが展開される要因に迫るためには、幼児だけでなく環境側に焦点を当てることが必要であり、空間や時間に制限のない森という可変的な環境（河口ら、2015）という視点が重要だと考える。

6. 森のようちえんは本来のKindergarten

フレーベルは、1830年代のドイツで幼児教育機関として普及しつつあった幼児学校を批判して、学校と異なるKindergarten（子どもの園）構想を実現した。その際、彼は花壇や菜園や果樹園からなる庭を必ず設置すべきと主張した。Kindergartenの名称が示すのは、「自然が最も素晴らしい教師である」「幼児は遊びによって学ぶ」という教育理念の具現化であり、幼児が自

表3 各月の昼食時間と場所

記録月日	時間	場所
4月21日	11時35分～11時50分	からんころん広場 (地面のシート)
5月12日	11時22分～11時47分	黄金池の周囲 (丸太)
6月16日	11時52分～12時12分	黄金池の周囲 (大石)
7月14日	—	(不明)
9月28日	13時24分～13時42分	公園広場 (ベンチ)
10月13日	12時16分～12時26分	奥の森上の斜面 (地面)
11月10日	11時34分～11時40分	おはよう広場横の斜面 (地面)
12月15日	—	(なし)
1月26日	11時59分～12時11分	黄金池の周囲 (テーブル)
2月16日	—	(なし)
3月1日	11時33分～11時44分	おはよう広場 (地面のシート)

7月は記録が途中で終わったために昼食は不明。12月は11時24分～14時06分まで、2月は12時01分～14時14分までの記録中に昼食が見られなかった。その前も昼食をとっていない。

然（園庭）で過ごす重要性であった。ここで、フレーベルの言葉を紹介すると、「植物や動物とくに若い動植物に、われわれは空間と時間を与える。これは、そうすれば、それらは、それらのうちに働いている、それぞれの個体のうちに働いている法則に従って、美しく発育し、立派に成長することを、われわれが知っているからである」（Fröbel, 1826）と記したのであるが、こうした事実を踏まえると、森のようちえんはフレーベルの理念に沿った幼児教育の場だととらえてよいだろう。広い空間とゆったりした時間は、森のようちえんで保証される。

次に、わが国で「幼稚園」の翻訳を担った桑田親五（1876, 明治9年；原典は Ronge & Ronge, 1858）は、書名と文中で「幼稚園」に「オサナゴノソノ」と、ふりがなをつけている。桑田は、フレーベルの創設した Kindergarten の語意に、「幼い子にやさしく、温かい花園」という幼子のための園というニュアンスを感じて、「オサナゴノソノ」としたと思われる⁴⁾。

また、日本の保育界に多大な影響を与えてきた倉橋惣三は、幼児期の子どもがふさわしい環境下に置かれると、自ら成長する力を持っているという子ども観を提唱して、保育の心を「自ら育つものを育てようとする心」と説明した（倉橋, 1936）。彼の講義録によると、「幼稚園において、庭を尊重するのは、幼児に自由感を十分に持たせるための他の理由があるからである。故に明るい、広い庭を要する。自由感の純真なものを起こさしむるためには、出来る限り、自然のままの環境に置くことが必要。これが自由感の上に重要な関係がある。戸外において感じる自由感は、健康のため以外にも実に有意義である」（菊池, 1990）と説明した。

せた♪森のようちえんに通う一幼児の行動観察から浮かび上がってくるのは、自由で主体的な活動を重視する森のようちえんの保育が子どもの本性を引き出しているという考察である。実際、豊かな自然環境に誘発されて、子どもたちは動植物の採集、木登り、および木の枝の操作やじゃれつき遊びなど、他の霊長類の子どもや狩猟採集民の子どもと同様な行動を示した。霊長類が出現した6500万年前から樹上性動物として存在し続け、人類700万年の歴史の中でも、約1万年前までは大半の人類が森で狩猟採集生活を送っていたという、生物進化と人類の歴史を踏まえると意義深い。

それに関して金子（1993）は、生物が本来持つ

ている能力を引き出すのは人智の及ばないことで、子どもの本性を誘発する自然に対して畏敬の念を抱く教育のあり方を論じ、自然の一員である人間の本性が正常に発揮できる教育環境を構築する自然教育を主張したが、その具体的な保育の場が森のようちえんといえよう。

最後に、今後の課題として挙げるのは、「遊び・作業」については、筆者が判断した明らかな意図を持った行動を分類したが、客観性の乏しさは否めない。遊びの定義は困難だった。その問題点を踏まえながら、今後は年少時1年目の記録をベースにして、今後2年間でどのような発達の変容が見られるか検討していきたい。

注

- 1) 「ようちえん」とひらがな表記にしているのは、森のようちえん全国ネットワークになっている。ネットワークでは、自然体験活動を基軸にした保育・乳幼児教育、子育て支援などの事業形態を「森のようちえん」と呼ぶ。（森のようちえん全国ネットワークHP：<http://morinoyouchien.org/about-morinoyouchien>）
- 2) 主体性の定義は「自分の意志・判断で行動しようとする態度」（大辞泉）である。本論では、保育者からの規制がほとんどない中で、子どもが自分たちで生活をつくっていくために、自分や仲間の願いに基づきながら、自らの意思・判断で行動しようとする様子を主体性の表れとみなして、ビデオ記録の行動分析とエピソード記録で示そうとする。
- 3) 「里山」とは、農業に必要な肥料や木材、薪炭をとるための農用林（里山林）のことを指し、「里山」は、人間が長期にわたって手を入れ利用してきた「文化としての自然」であり、日本人にとっての原風景とも呼べる景観である。（龍谷大学里山学研究センター：<http://satoyamagaku.ryukoku.ac.jp/index.html>）
- 4) 玉川大学教育博物館（「全人」1990年8月号（No.506）玉川大学広報誌：<http://www.tamagawa.ac.jp/museum/archive/1990/005.html>）

引用文献

Fröbel, F. (1826) Die Menschenerziehung: die Erziehung=, Unterrichts=, und Lehrkunst, angestrebt in der allgemeinen deutschen

- Erziehungsanstalt zu Keilhau. (フレーベル, F. 荒井 武 (訳) (1964) 人間の教育:上. 岩波書店.)
- 今村光章 (編) (2011) 森のようちえん: 自然のなかで子育てを. 解放出版社.
- 今村光章 (編) (2013) ようこそ! 森のようちえん: 自然のなかの子育てを語る. 解放出版社.
- 梶浦恭子・今村光章 (2015a) なぜ幼児は「森のようちえん」で枝を拾うのか: 幼児の行動記録を手がかりに. 環境教育. **24**, 137-144.
- 梶浦恭子・今村光章 (2015b) 「森のようちえん」の幼児が触れる自然物に関する実証的研究. 環境教育. **25**, 176-183.
- 金子龍太郎 (1993) 自然教育論・試論. 幼年教育研究年報. **15**, 51-59.
- 笠次良爾・長谷川かおり・木村公美・川淵洋子・原田眞智子・大原千晶・清水智佳子・竹内範子・玉村公二彦 (2014) 歩数計とカードを用いたセルフモニタリングが幼稚園児の園内歩行量に及ぼす効果. 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要. **23**, 105-110.
- 河口麻希・森 依子・候 盛濱・城田花弥・七木田敦 (2015) 森やその付近での遊びの移行に関する研究: 遊びの「場所」と「活動」に着目して. 幼年教育研究年報. **37**, 85-90.
- 木戸啓絵 (2010) 現代の幼児教育から見たドイツの森の幼稚園. 教育人間科学部紀要. **1**, 69-85.
- 菊池ふじの (監修), 土屋とく (編) (1990) 倉橋惣三「保育法」講義録. フレーベル館.
- 久原有貴・関口道彦・小鴨治鈴・松本信吾・七木田 敦・杉村伸一郎・中坪史典・上田毅・松尾千秋 (2015) 森の幼稚園の園児および卒園児の身体活動量と体力・運動能力との関係. 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要. **43**, 25-33.
- 倉橋惣三 (1936) 育ての心 (上). 復刻版 (1988) フレーベル館.
- 中西さやか・中坪史典・境 愛一郎 (2010) 「森の幼稚園カリキュラム」における幼児と自然との相互作用に関する研究: 他者とのかわりにみる幼児の変容プロセス. 広島大学大学院教育学研究科紀要. **59**, 167-174.
- 中坪史典・久原有貴・中西さやか・境 愛一郎・山元隆春・林よし恵・松本信吾・日切慶子・落合さゆり (2011) アフォーダンスの視点から探る「森の幼稚園」カリキュラム: 素朴な自然環境は保育実践に何をもたらすのか. 広島大学学部・附属学校共同研究紀要. **39**, 135-140.
- 名須川知子・片山知子・米澤正人・上河内伸子・田爪宏二・富田久枝・西脇二葉・吉川はる奈 (2012) 「森の幼稚園」試論: 北欧から学ぶわが国の幼稚園への可能性. 兵庫教育大学研究紀要. **40**, 11-17.
- 根ヶ山光一 (1997) 親子関係と自立: 日英比較を中心に. 柏木恵子・北山 忍・東 洋 (編) 文化心理学: 理論と実証. pp.160-179. 東京大学出版会.
- 西澤彩木・田中裕喜・管 眞佐子 (2016) 幼児における自然環境についての学び: 「森のようちえん」の活動を通して (1). 滋賀大学環境総合研究センター研究年報. **13**, 23-37.
- 長田 新 (1955) フレーベルに還れ. フレーベル館.
- Ronge, J. & Ronge, B. (1858) A Practical Guide to the English Kindergarten (Children's garden), for the use of Mothers, Governess, and Infants Teachers. London: Hobson. 桑田親五 (訳) (1876) 幼稚園 (オサナゴノソノ) 上巻. 文部省. (復刻版: 1978 日本らいぶらり.)
- 坂本喜一郎・篠原菊紀・柳澤弘樹・堀 昌浩・竹内勝哉・井 量昭 (2014) 保育所における園児を取り巻く多様な物的環境と, 子どもの身体活動量の関係に関する研究. 保育科学研究. **5**, 39-56.
- 田中千晶・田中茂穂 (2009) 幼稚園および保育所に通う日本人幼児における日常の身体活動量の比較. 体力科学. **58**, 123-130.
- 東方真理子 (2011) 森の幼稚園における自然とふれあうことの意味. 東京大学大学院新領域創成科学研究科修士論文.
- 吉岡由美・戸井田英子・佐藤晶子・小木曾加奈・中澤弥子 (2012) 保育園での活動内容と歩数調査による園児の運動量の関係. 長野県短期大学紀要. **67**, 33-41.

付 記

本研究は, 龍谷大学国際社会文化研究所の助成を受けて行われた。